

学位論文題名

マックス・ヒンデルと田上義也

—大正・昭和前期の北海道建築界と建築家に関する研究—

学位論文内容の要旨

本研究は、北海道の近代建築史上においてほぼ同時代に設計活動を開始し、かつプロフェッショナル（職能）を強く意識した建築家の先駆けともいえる2人のフリーアーキテクト（組織に属さず活動した自営建築家）、マックス・ヒンデル Max Hinder(1887～1963)と田上義也(1899～1991)をとりあげ、両建築家の経歴、業績、作品・著述活動等について総合的に検討し、北海道における近代建築家像の一端を明らかにすることを目的としている。両者が札幌で活躍した頃の北海道建築界は、官庁営繕組織や営繕技術者達が主流を占めており、組織に属さないかつ職能に自覚的な自営建築家の存在は、きわめて少数派であった。さらに2人の経歴や作品活動を理解する下地として、両者が建築家活動を展開した札幌を中心に、大正・昭和前期(1920～30年代)の北海道建築界についての概観を試みている。

序章では、日本の近代建築家研究が主に中央で活躍した人物を中心であり、外国人建築家に関しても、中央で活躍した建築家たちを対象とし、ヒンデルのように地方で活動した人物を扱ったものはほとんどみられないこと、北海道における建築家研究は営繕技術者、営繕機構を対象としたものが主で、民間建築家に関しての体系的な研究はほとんどみられないことなどを指摘した。

第1章以下は大きく3つの論旨で展開し、第1部は両建築家が活動した時期の北海道建築界の動向を概略把握し、2部ではマックス・ヒンデル、3部では田上義也をとりあげた。

第1部 大正・昭和前期の北海道建築界と建築家

第1章では、2人の建築家が活動を展開した札幌を中心に、大正昭和初期(1920～1930年代)にかけてのモダニズム期の北海道建築界の動きを概観し、市街地建築の多くが道外建築家や建築事務所で設計されていること、鉄筋コンクリート造採用の先進例としての函館の状況について述べた。さらに北海道庁や札幌、函館、小樽、旭川など主要自治体の営繕作品年表を試作し、当時の北海道建築界の官主導型の一面を明らかにし、また専門建築技術者を擁することのできなかった地方自治体での嘱託技術者雇用例として、空知地方12市町村の営繕事業に関与した音江村（現深川市）石井喜助(1893-1977)の存在を指摘した。

第2章は、都市文化の高揚に大きな影響を与えた5博覧会(1918年開道五十年記念博覧会、1926年国産振興博覧会、1931年国産振興北海道拓殖博覧会、1931年小樽海港博覧会、1937年北海道代博覧会)をとりあげ、設計スタッフ構成やパビリオンの施設概要を中心に述べた。第3章では、札幌市における新興住宅地の開発と、「モダン住宅」とか「文化住宅」とか呼ばれる住宅が、建築家の設計ばかりでなく、施主や棟梁たちによって創造され、また近郊農家住宅にもみられることを指摘した。

第2部 マックス・ヒンデル

スイス人建築家マックス・ヒンデル(1887-1963)は1924年に来道し、3年半の札幌滞在後横浜市に移住、1935年設計事務所解散、1940年ドイツバイエルン地方レーゲンへ旅立つまで、在日外国人

建築家として活躍した。第4章は、マックス・ヒンデルの経歴と作品活動の概要、第5章では札幌時代の作品を、住宅建築、学校建築、宗教建築、スキーヒュッテなど建築種別ごとに概説し、さらにジュネーブ国際連盟会館設計応募案についてふれた。第6章では、横浜時代の作品としてヒンデル邸(1927)を含む住宅建築、宇都宮天主公教会など宗教建築のほか、聖母病院(1931)、名古屋市南山中学校本館(1932)、上智大学校舎(1932)をとりあげた。

第7章は、第2部のまとめであり、ヒンデルが建築家の職能について市民啓蒙を図ったこと、日本建築や日本文化を積極的に理解しようとしたこと、ヒンデルの作風として、住宅では、急勾配の裾広がりのフレアード屋根、こけら葺きや鉄板葺きの外壁防寒処理、引き戸、引違窓の採用など、住宅以外の作品ではロマネスク様式への顕著な傾倒を中心に、住宅に通じるフレアード屋根の扱い、鐘塔、尖塔の付加などの共通モチーフを明らかにし、さらにヒンデルの作風に積極的なモダニズムへの移行は見られない点を指摘した。

第3部 田上義也

田上義也(1899—1991)は、青山学院中等科、早稲田工手学校卒業後、1918年帝国ホテルの現場事務所に採用され、翌1919年来日のF.L.ライトに1年4カ月ほど師事し、ライトから建築家のプロフェッショナルについて学んだ。1923年11月北海道に渡り一時バチェラー博士宅に寄留、翌年道東の旅を契機に北海道での建築活動を決意し、1925年札幌時計台での第1回建築展で建築家としてデビューした。1920年代には住宅を中心、1930年代には「雪国的造型」をキーワードに精力的な活動がみられたが、1930年代後半から設計依頼は激減し、北ノ王鉱山(1937)、帝産航空機落部工場(1944)などの産業施設を最後に戦後1951年の再出発まで建築家としてまったくのブランク期をむかえることになった。本論文で対象とした作品活動もこのブランク期以前としている。

第8章は経歴および戦前期の作品活動の概観、第9章では、3回の建築作品展覧会のうち、資料が残る1回展(1925)と3回展(1930)および、『田上義也建築画集』(1931)にみられる田上義也の設計理念や制作姿勢について論考した。

第10章は住宅作品を対象に、1920年代のライト風スタイルから1930年代の「雪国的造型」への過程をライト風から脱却して独自の作風を求める過程と位置づけ、処女作と考えられる大竹虎雄別邸(1921)、北海道での住宅作品第1号でかつ雪国的造型の模索がみられる高田治作邸(1925)のほか、代表作をライト風住宅、「雪国的造型」住宅、「雪国的造型」にいたる習作としての片流れと陸屋根住宅、インターナショナルスタイルを意識した住宅、東京郊外の住宅に分類し、個々の作品を通じて田上の設計姿勢、建築観を考察した。ライト風とは、ライトの草原住宅にみられる自然と融合する水平性の強調や十字形平面の採用などの直接的な影響がみられる作品である。一方「雪国的造型」住宅では高さや垂直性が強調され、南面の大きなガラス開口、保温性を意識したコンパクトな平面構成などが特徴的である。部分的にはライト風意匠も認められ、ライト風を意識しながら自己様式を確立していく過程を見ることができた。

第11章と12章では住宅以外の作品をとりあげ、第11章では1920年代の代表作が、本道における作品第一号のバチェラー学園(1924)、ヒンデルとの競作であった札幌北一条教会(1927)のほか、ライト風の影響の強い作品であったことを指摘した。第12章では1930年代の作品を、書き割り表現のみられる商業建築、モダニズム期の代表建築としてのカフェ・飲食店、陸屋根表現などインターナショナルスタイルを意識した病院建築、艦船デザインを意識したホテル建築、その他に分類し、「雪国的造型」を第一目標としながら、ライト風スタイルからの離脱志向がより顕著であることを指摘した。さらに産業施設設計画である北ノ王鉱山と帝産航空機落部工場をとりあげ、作品活動の激減期に蓄積した創作エネルギーの発散の場であったことを指摘した。

第13章は第3部のまとめであり、10章～12章の作品概要をふまえ、1920年代と1930年代の作品では大きな変化がみられ、ライトの精神を土台にしながらも、むしろライトの作風から抜け出すことを意識しつつ、積雪寒冷地に適した建築作品の創造に向けての過程の到達点の一つが雪国的造型であること、著作に見られる主張でも一貫して「雪国的造型」意図の確立であることを指摘している。

結章では、第2部、第3部で検討したヒンデルと田上義也、両建築家の戦前期の作品や著作活動

の検証をふまえ、官主導型ともいえる戦前期の北海道建築界にあって、両建築家に共通する北海道近代建築史上における位置付けとして、(a)建築家の職能についての市民に対する啓蒙、(b)北国の設計条件を取り入れた北海道向き建築の提案、(c)安易な国際様式傾倒に対する警鐘、(d)それまでの建築家がほとんど対象にしなかったようなスポーツやリゾート施設、カフェーや喫茶店など小規模商業施設といった設計ジャンルの多様性の4点を指摘した。

学位論文審査の要旨

主査教授 越野 武 副査教授 荒谷 登
副査教授 真嶋二郎 副査教授 小林英嗣
副査教授 佐藤馨一

学位論文題名

マックス・ヒンデルと田上義也

－大正・昭和前期の北海道建築界と建築家に関する研究－

本論文は、大正末期に北海道で設計活動を開始した2人の建築家、マックス・ヒンデルと田上義也をとりあげ、両者の経歴、作品・著述活動などの業績について詳細に調査研究した結果をまとめたものであり、当時の北海道建築界にあって、両建築家が、プロフェッショナルを強く意識した自覺的なフリーアーキテクトの先駆け的存在であることを明らかにしている。あわせて、両建築家の活動背景を知る上で、大正から昭和前期にかけての北海道建築界について概説を試みている。本論文の主要な成果は、次の点に要約される。

- ①大正昭和前期の北海道建築界においては、民間建築家の存在はまれで、官主導型であった状況を述べ、さらに具体的に5つの博覧会の開催、新興住宅地の開発など、モダニズム形成期に当る大正昭和前期の建築界の概要を体系的に明らかにした。
- ②スイス人建築家マックス・ヒンデル(1887-1963)の経歴および在日作品活動について、詳細に調査研究し、その作風、建築観について明らかにした。
- ③田上義也(1899-1991)の戦前期の主要作品活動を建築種別ごとに詳細に述べた上で、その作風が1920年代と1930年代では大きく変化し、ライト風から脱却して積雪寒冷地に適した雪国的造型を目指したこと、これを裏付ける著作活動でも一貫して雪国的造型意図の確立がテーマであったことを指摘し、ヒンデルとともに北海道建築の質的な向上に寄与したことを見た。
- ④2人の建築家の北海道建築史上における共通の位置付けとして、(a)建築家の職能について広く市民に啓蒙したこと、(b)北海道向き建築の提案、(c)安易な国際様式傾倒への警鐘、(d)設計ジャンルの多様化への対応、の4点を指摘した。

以上のように本論文は、建築家2人の具体的な活動経歴の解明を通じて、北海道建築史の1頁を明らかにするとともに、日本近代における建築家の職能確立過程を考える上で新知見を得ており、建築学の進歩に寄与するところ大である。

よって著者は、北海道大学博士（工学）の学位を授与される資格あるものと認める。